日本行動計量学会会報

第17号
1979年1月10日

日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

喫煙論争をめぐって

古川俊之

タバコの害について医学の立場から言うことは今更ない。Framingham での疫学調査を分析すると、紙巻タバコ一本で五分三〇秒の寿命が失われるから、一日二〇本を喫う人は一日が二二時間しかない勘定になる。

それはさておき日本と西欧の喫煙率の差は驚くべきものがある。一九七五年のアメリカでは男性三九%、女性二九%が喫煙者であるのに対し、一九七七年の日本の統計では男性七五%、女性一五%という数字が出ている。アメリカでは喫煙者は一九六六年に男性五二%、女性三二%であったのが、明らかな減少傾向を示しているのに対し、日本ではタバコの販売量はわずかに減ったといわれる程度である。因みにアメリカの医師の喫煙率は、一九七五年二一%で、一九六六年の三〇%から着実に減少している。日本の医師はどうかと言うと、先日がんの計量疫学研究者の会に出席したところ、半日の間一〇〇名ばかりの人が一本のタバコも喫わなかったのは流石であった。しかし循環器系の研究者の集まりでは、相変らず紫煙と縁の切れない人も見受けられる。それらの人に訊いてみると、大体同じ答えが戻って来る。それによると統計、とくにFramingham study などの結果を疑う人は一人もいない。しかしタバコをやめることはまた別ダネ、とか、酒も害があるというけどどうなのかナ、といった風でうやむやにされてしまうのが落ちである。

それでは日本の医師は統計も理解できない愚蒙の輩ということになるのであろうか？　私はこの説明不可能な統計軽視を、科学との出合いから一〇〇年しか経っていない日本の宿命と見ることを提案したい。

考えてみると日本の科学の歴史はようやく一〇〇年にしかならぬのに対し、西欧社会のそれは四世紀にも及んでいる。西欧の数字は、たとえばフィリッポ二世の政治顧問を勤めたライプニッツのような実学者によって形作られたが、日本の和算は商人の形而上的な知的遊戯に終始した。つまり日本の社会では科学は古くからの文化の外に位置する外来者であり、文化とは枕草子であり徒然草であるという思想がガッチリと腰をおろしている。そのために科学批判ひとつをとって見ても、西欧では社会の存続の意味を問う文明批判であるのに対し、日本では科学を象徴する技術への批判に議論が集中している。こういう形態の批判である限り、日本の科学批判は精神のあり方を問うに至らないことは明らかである。新参者は村八分にすれば古い思想や体制は安泰だからである。人間の理性は比較的容易に新しいものを受け入れる。しかし社会が伝承して来た無形の文明観、価値観が変わるには、巨大な慣性の抵抗があろう。われわれの社会が科学を文明の骨肉としてとり入れるには、現在の三〇〇年の隔差を埋めることが前提であると感じるのである。

（日本行動計量学会理事・東京大学医学部教授）

〃〃〃〃〃〃〃 学会費納入のお願い！

五十三年度会費（正会員四千円、準会員二千五百円）を未納の方は、至急、ご納入ください。また五十三年度以前の分を滞納している方もよろしくお願いします。

送金は振替（振替番号、東京八一一四八〇五六、日本行動計量学会）をご利用ください。納入がないと学会活動に支障が生じます。未納の方々、よろしく。

会議議事録

◇理事会（十二月九日）
於　統計数理研究所
出席者　理事　七名

1. 次回総会の開催校について、肥田野総会担当理事から候補校との折衝結果について報告があり、これにもとづき来年度の第七回総会は大阪市立大学で行うことに決定した。
今後は、同大学の生沢雅夫理事を中心に、日程などを検討の上具体的な準備を進める。

2. 本年度総会（第六回）について、実行委員会提出の決算報告を承認した。収入総額は九五万八百円、支出は九九万三百三十一円で、支出超過となった。超過分は学会の一般会計から補塡する。

3. 第六回総会の研究発表に関して適用した二つのルール、『発表者は連名の場合も含めて本学会の会員であること』および、『口頭発表者になるのは一人一回とすること』を、今後も継承することにする。ただし、後者については特殊な場合に備え、〃原則として〃を付すことにする。

4. 現在、年一回発行の欧文誌を年二回発行に改める件について、経費面の条件が調い次第、実行に移せるよう編集委員会を中心に準備を進める。

5. 運営委員会より追加推せんのあった、中江公裕（独協医大）、直井優（東大文）の両氏に運営委員を委嘱する。

6. 「行動計量学シリーズ」刊行について、企画当初からかなり時間が経過した状況をふまえ、刊行物企画委員会を中心に今後の進め方を検討する。

7. 各種委員会報告

◇運営委員会（十一月十三日）
於　統計数理研究所
出席者　運営委員　七名

1. 第二十二回月例シンポジウムを十一月二十五日、統計数理研究所にて行う。テーマは「行動計量学の方法論をめぐって」。オーガナイザーは林知己夫理事長である。
第二十三回は、テーマを「臨床と疫学における意志決定のための数理モデル」として、科研総合A三班合同公開研究会と共催の形で、五十四年一月二十日に大阪大学で開催する。

2. 五十三年十二月開催の、第九回講習会「医学生のための行動計量学セミナー」の案内書が、井上通敏委員の手でできあがり、全会員に発送する。

3. 小グループ研究会に対する補助の問題については、担当委員を中心に再考し次回までに方針を決める。

「癌研究における生物統計」の国際会議に感じること

工藤昭夫

会報第一六号に、日米癌研究協力事業による標記の会議のニュースを柳本武美氏が書いておられるので、この機会に日本側開催責任者としての所感を述べたい。

責任者として、米国側と接触するときに感じたことは、何としても肩身のせまい思いであった。角谷の不動点定理、木村の集団遺伝学の中立説のようなハイレベルのものと比較するのは妥当でないかもしれないが、医学系の統計で、国際的に認められた業績は何なのだろうか。

統計に関係のある日本人の業績で、統計と無関係であり得ない学会―例えば臨床心理、人類遺伝、公衆衛生、MEなど―で発表される数はおびただしいものであるが、国際統計協会や、バイオメトリックソサイアティなどで認められ、統計の論文の引用文献に登場するまでになった業績は、どれだけあるだろうか。

林知己夫氏の数量化の医学への応用を例にとる。この方法の重要さを今さら取り上げて論ずる必要はない。問題はどの程度外国の医学者に理解、引用、利用されているかである。国際会議に出席し、講演することは比較的容易な時代になったが、講演だけで終れば殆んど無意味である。

会議の報告集のため、鈴木隆一郎氏と共著論文―数量化Ⅱ類の医学への応用のレビュー―をまとめたが、国内から国外への情報の流れは「鎖国」を連想させるくらい、不十分であることが分った。興味のある方にはコピーをお送りする。

（日本行動計量学会会員・九大理学部数学教室）

第七回総会は、大阪市立大学で例年どおり九月に開催

昭和五十四年度の日本行動計量学会の総会（第七回）は、大阪市立大学で開かれることに決定しました。総会が東京以外の地で行われるのは、一昨年の第五回総会の岡山大学についで二度目です。

会期は例年どおり、九月となる予定ですが、具体的な日程と内容は、生沢雅夫氏（大阪市大・文）を中心に結成準備中の総会実行委員会で決められます。

総会プログラムの具体案が決まれば、全会員に〃総会案内〃が送られます。ふるって研究発表の申込みをしてくださるようお願いいたします。

第八回〃サイバネティクスと社会〃国際会議について

国際会議　大河内正陽

標記の国際会議が昭和五十三年十一月三日から五日まで、東京の専修大学校舎で、十一月七日、国立京都国際会館において開催された。総員四五〇名、外国からは十六国八十名の参加があった。研究発表申込み数が三八〇、採択発表件数が約三〇〇と参加者数に比して、発表件数の多いのが本会議の一つの特色であったといえよう。

この国際会議の内容は、学際、広範囲にわたるが、会期が四日であったため、一般研究発表は、同時に一〇会場で行われた。会議は①医学サイバネティクス、②人間行動と社会システム、③経済システム、④環境と資源、⑤公共サービスへのコンピュータ利用、⑥システム科学、の六つのシンポジウムで構成されたが、サイバネティクスの基礎ともいえる⑥のシンポジウムが最も活発で、約一二〇件の研究発表が、つづいて①の医学で約七〇件の発表がなされた。他は平均約三〇件であった。

セッションによって差はあったが、そのいくつかでは、きわめて内容の濃い、価値のある研究の発表が行われ、参加者の興味をそそったようである。このように種々の学問分野の研究者が一堂に会する機会は少なく、学問分野の異なる研究者の交流には大変役立ったと思うし、また会議は終始和やかな雰囲気のもとに進められた。

この会議の目的は、行動計量学会の日本における活動ときわめて類似しているように思う。今回のささやかな成果は行動計量学会で吸収していって頂きたいし、またいつの日か再びこの国際会議が日本で開催されるときに、行動計量学会が強力な共催者となって頂けることを強く期待している。

なお日本経済不況のため、募金には大変苦労し、実に百数十の企業団体等からの寄付、援助によって、所期の目的を達し得た。

協賛の日本行動計量学会をはじめ、これらの諸団体に深甚な謝意を表する次第である。（日本行動計量学会会員・専修大学教授）

月例シンポジウム記録

○第二十二回〃行動計量学の方法論をめぐって〃（オーガナイザー林知己夫氏・統数研）　十一月二十五日、統計数理研究所、参加者四十八名。

学会誌へ、論文の投稿を！

▽欧文誌「Behaviormetrika」、和文誌「行動計量学」へ、会員の皆さんの積極的な投稿をお願いします。

▽このところ、海外に送られる欧文誌の冊数が増えてきました。また、欧文誌の年二回発行が実現に向って動き出しました（3ページ議事録参照）。編集委員会は、これの増刊による諸問題の検討を進めています。和文誌の方も増ページなど、充実・向上を期しています。

▽しかし、それも多くの論文が質を競い合う状況が伴ってのことです。ふるって、ご投稿ください。投稿の要領については既刊誌所載の応募規定を参照してください。また、学会誌の編集方針についての希望がありましたら、編集委員会までお寄せください。どんな小さなことでも歓迎します。会員全体の力で、学会誌の充実を図りましょう。

◎会員（一月一日現在）
（正）八二一人（準）一六七人
（賛助）三四法人

学会誌で、気がついたこと

会員の声

村上征勝

細かいことですが、学会誌を読んで気づいたことを述べますので御検討下さい。まず、同じ学会の学会誌であるにもかかわらず、和文誌（行動計量学）には著者紹介の欄があり、一方、欧文誌（Behaviormetrika）にはありません。統一を図られたらいかがでしょうか。また、和文誌と欧文誌が別々に編集されているためでしょうか、両者の間に何の連絡もみられません。和文誌には欧文誌の論文の要約を、欧文誌には和文誌の論文の要約を載せたらいかがでしょうか。本学会のように会員の研究分野が多岐にわたるような場合には必要ではないかと思うのですが、要約が無理でしたら、論文名と著者名だけでもよいと思います。ある学会誌が、昨年から欧文誌、和文誌を統一して一冊にし、各論文の最後に原文が欧文の場合には和文の、和文の場合には欧文の一ページほどの要約を付けて編集されています。もちろん、本学会において欧文誌と和文誌の二つを発行しているには、それなりの理由があるとは思いますが、これなども学会誌の新しいあり方の一つだと思われます。御検討下さい。

ところで私事で恐縮ですが次の本を捜しています。それは、L.T.Milic の A quantitative approach to the style of Jonathan Swift.（Mouton & Co.）です。出版社に問合せたところ、すでに絶版になっているとのことで、会員の中にもしお持ちの方がいらっしゃいましたらお貸し願えないでしょうか。（日本行動計量学会会員・統計数理研究所）

◇会員の声をどしどしお寄せください。お待ちしています。

◇また、本学会会員を中心とする小グループ研究会は、最近の活動状況を紹介してください。　〈運営委広報係〉

事務局から

◇『頭は使いません、手足をつとめます』と宣言して、前任者から事務局を引継いではや2年が過ぎました。そうはいっても、会員諸氏へのサービス向上はなかなか果せず、いつも申し訳なく思っております。

◇先の年末は欧文誌、和文誌の発送が重なりました。おりから郵政労使の紛争で郵便事情がわるい中で、なんとか年内に会員の手へ…と願って頑張りましたが、さて結果はどうだったでしょうか。

◇会員数も千名の規模になると、弱体な現事務局では、会員への適切、迅速なサービスも少々あやしくなります。

◇コンピュータ化ということも考えなかったわけではありません。元来こういうことの得意な人が多い学会ではないか、その事務が原始的状態では、これこそ紺屋の白ばかま……というわけで、学会事務用のプログラム・パッケージの作成を夢みたりしたものです。

◇しかし、よく考えるとコンピュータ化も一長一短、効果的とは申せません。たとえば、業務能率のアップに成功したとしても、発送物が転居先不明で舞い戻るようでは、なんにもなりません。

◇そんなわけで、少くとも当分の間は、寛容の精神に富む会員諸氏の良識あるご協力をお願いしたいと思います。住所の異動届などはどうか忘れずにお出しください。逆戻りする発送物には、頭を使わなくても、頭が痛んでおります。

◇創立6年目を迎えた本学会も、前途に多くの課題を残しております。〝手足〟事務局のあり方もその末端に加えていただき、会員諸氏の暖いご指導をお願いする次第です。新しい年のはじめに当たり、一言述べさせていただきました。

◇ご活躍を祈ります。（事務子）

講習会・月例シンポジウムの企画について、ご希望を！

年に2回、開かれる講習会（有料ですが）と、不定期ながら年に数回開催される月例シンポジウムは、本学会の特色ある活動です。

会員相互が、ホンネを出して気楽に研さんできる場として、回を重ねています。毎回の企画は運営委員会が行なっていますが、係ではできるだけ多くのご要望にそえるよう、会員の皆さんのご意見、ご希望を求めております。企画について、なんでも結構ですので係までお寄せください。皆さんのアイデアで、なお一層意義ある活動にしたいと願っています。